

第19章 宮崎県A中学校

- 校長のリーダーシップによる地域と連携した学校づくり -

地域に根ざした学校を創るという経営方針のもとに、校長自ら先頭に立って地域との連携が進められている。地域が学校を見る目も変わり、関係が密になりつつある。生徒もボランティア活動などで地域との交流を深めている。校長が、地域の関係者、教頭はじめとした教職員と積極的にコミュニケーションをとり、地域との連携を軸にした学校づくりを見事に成し遂げた事例である。

1. 調査の方法

(1) 調査時期

平成16年10月25日9時00分～12時00分

(2) インタビュー対象者

校長と教頭

(3) 収集資料

各種委員会の手引き / 生徒指導ガイダンス / 平成16年度学校経営方針 / 学校評価資料 / 授業参観後の感想記入用紙 / 平成16年度学校経営案 / 平成14・15年度研究紀要

2. 学校の概要

(1) 学校の基本特性

A中学校は、平成4年に新設された新しい中学校である。生徒数は560名、教職員数は、校長、教頭、臨時職員を含めて46名である。学校は、新興住宅地の中に存在している。したがって校区が比較的狭いという特徴がある。また地域としてのまとまり、昔ながらの人々の結びつきが強いわけではない。

保護者の教育に対する関心は高く、基本的な生活習慣の育成や学力向上など学校教育に対する期待は大きい。保護者の学校への要求も多く、その水準も高いようである。

校長は赴任2年目、教頭は赴任1年目になる。校長、教頭とも行政経験が長い。その関係で、今日の教育改革の動向などもよく理解されており、しっかりとした学校づくりに取り組んでおられる。教職員は、若い教員が多い。したがって、活気はあるものの、まだまだ未熟な点も多いと校長、教頭は感じている。

後述するように、校長は、地域に根ざした学校づくりを積極的に行い、その成果として、学校の評判は高い。

(2) 学校経営の方針、教育目標

学校経営の方針として、親子ともに「自分の学校」として誇りを持ち、すぐれた知性と豊かな心を備えた信頼される人づくりへの大きな期待にこたえるため、学校の役割機能の発揮に努める、ということが示されている。

学校の教育目標は、「チャレンジ精神で好ましい校風を築く知性ある生徒の育成」として、具体的に、しっかり学び、実践する、思いやりをもち、人に敬愛される、がまん強く、心身ともにたくましく成長する、進んで働き、責任を果たす、という目標が示されている。

教育課程については、紙幅の関係で、詳細は述べることはできないが、教育内容として、教科全体計画、道徳教育全体計画、特別活動全体計画、総合的な学習の時間全体計画、生徒指導全体計画、同和教育全体構想、進路指導全体計画、情報教育の全体構想が、それぞれ図解的に示されている。別紙参照。学校の教育目標との関係、各計画の目標、指導事項、努力点、重点目標などがそれぞれ示されるとともに、他の領域との関係も示されており、構造化された形で作成されている。

(3) 学校内部組織と運営方法

学校内部組織は、図のとおりである。校長、教頭のもとに、企画委員会と職員会議がおかれている。さらに、研究推進委員会、就学指導委員会、学校保健委員会、いじめ・不登校対策委員会が設置されている。また研究推進委員会とのつながりにおいて、学年部会、教科主任会、教科部会、同和教育推進委員会が設置されている。そのもとでの校務分掌組織として、事務と教務に分けられ、教務には、教務部、学習部、生徒指導部、保険安全部、環境整備部が置かれている。事務には、渉外部と事務部が置かれている。

(4) 保護者・地域との関係

後述するように、校長の方針により、積極的に地域とのつながりを持つようになっている。校長、教頭が先頭に立って、地域の会合や行事に参加しており、それに引っ張られる形で、他の教職員の参加も活発になっている。地域、保護者とともに行う活動も活発である。生徒も地域でのボランティア活動を行っている。

(5) 学校評価

保護者、生徒による、アンケート形式での学校評価が行われている。評価項目は、生徒、保護者とも学校経営、教科・学習指導、生徒指導、その他、特色ある取組み、についてである。また保護者には、授業参観の後に、その授業に関して簡単なアンケート調査も行われている。生徒、保護者による評価を踏まえた学校評価を行っている。

3. 校長のリーダーシップ

(1) 明確なビジョンの提示

校長は、自らのビジョン、学校経営方針を明確な形で、教職員に伝えている。平成16年度については、4月1日の職員会議でそれを伝えている。「平成16年度学校経営案」にも掲載されている教育目標、学校像、生徒像、教師像が示されるとともに、教育活動の根底に据えて欲しい事柄として、3つのことが述べられている。第一は、出会いと認め合いを大切にする教育をしてほしいこと、第二は、社会常識による判断と行動をとること、第三は、「地域に愛される学校」、「地域に根ざした学校」を皆でつくっていくこと、という三点である。抽象的な理想像ではなく、教育活動や学校づくりを進めていくうえでの校長の思いがよく伝わる内容であると言える。こうしたビジョンの提示により、校長が何を考えているのかを教職員はよく理解でき、またそれぞれの教育観、学校観を見直す機会ともなると言えよう。

ビジョンの明確化は、別紙のような学校における諸活動の全体計画にもあらわれている。教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、生徒指導などについてそれぞれの重点目標などの全体計画を、学校の教育目標や目指す学校像、生徒像などとの関連を明示しながら図解的に示している。これらは、それぞれの活動の意味、学校全体の目標との関連を

常に意識させるうえで有効であると思われる。

また校長は、ヴィジョンを示すだけでなく、自ら率先して行動する。非常に行動力のある校長である。自ら率先して行動で示すことから、教職員もそれに引っ張られる形で、自発的に動くようになっている、という印象を受けた。

(2) 校長と教職員とのコミュニケーション

校長は、教職員とのコミュニケーションをとることを重視している。校長室と職員室とが離れており、校長室は1階にあるものの、職員室は2階にある。したがって、印鑑等の用事がない限り、教職員が校長室に来ることがない。したがって、校長のほうから意識的に職員室に出向き、教職員といろいろな話をするように心がけているということである。教職員との間で話をしやすい関係を作っている。そのために、インフォーマルな形で、学校内のいろいろな問題について、教職員は校長によく話をしており、校長の耳にさまざまな情報が入ってきている。校長も教職員と話をする機会を意識的に持つように心がけている。校長と教職員との間によい関係が作られているという印象を持った。

そうした校長と教職員との関係作りには、教頭が大きな役割を果たしている。校長は、出張のため不在の日が多くなっている。したがって、校長と教頭とは常に連携を密にして、学校経営に当たっている。教頭は、校長の方針、ヴィジョンをよく理解している。校長の発言が、教職員にうまく伝わらないときには、教頭が校長の真意を教職員に伝えることも少なくないようである。また校長も教頭をとて信頼している。

校長のリーダーシップが発揮され、学校経営が円滑に進められるには、よく指摘されるように、教職員の間関係が良好であることが欠かせない。A中学校は、校長と教頭との信頼関係を核として、教職員全体に良好なコミュニケーションがとられ、協力体制が作り上げられているように思った。その要因は、校長の姿勢、見識であり、つまるところ、その人柄によるところが大きいのと思う。それは、学校や教育行政の現場でのさまざまな経験を通じて培われてきたものと思われる。

4. 学校の組織運営の方法 方針と責任の明確化

毎朝、校長、教頭、教務主任が打ち合わせを行い、さまざまなことを話し合っている。その中で、校長は自分の考えを教頭や教務主任に伝えている。また教頭、教務主任もそこにおいて校長の考えを理解する機会とするとともに、自らの考えを校長に伝える機会ともなっている。教頭によれば、校長にいろいろなことを発言しやすい雰囲気になっているということであり、校長も意識的にそうした姿勢をとっているようである。

校長、教頭、教務主任、各部長、学年主任によって企画委員会を組織して、週1回開催している。職員会議に提案する場合には、必ず企画委員会に諮ることになっている。教頭が司会を行う。企画委員会の場で、校長は自らの考えを述べている。職員会議では特に発言することはなく、むしろ、議題を提案する担当者の主体性を尊重し、それに従うというような態度もとるとのことである。校長の言葉を借りるならば、生徒指導関係であれば、生徒指導部長が学校の隊長であり、生徒指導に関しては隊長である生徒指導部長に自分も従う、そうした姿勢で学校運営を行っているということを述べておられる。

上記の校長の発言からも明らかなように、各校務分掌組織の責任者に責任を委ねるという方針で、学校運営が行われている。校務分掌の中で、各部の部長に責任を委任すること

を徹底して行っているようである。責任をもたせて、主体的に考えたり、提案したりすることを奨励している。それぞれの部の部長が、学校の中で担当している事柄を最もよく考えているのであるから、部長に当たる教員の考え方を尊重しているということを校長は強調しておられた。各部長には積極的に発言させたり、提案させたりして、そうした提案されたことを否定することはせず、すべて受け入れるようにしているということである。その上で校長の意見を言うこともあるようであるが、信頼して委ねるという運営方法が特徴的である。

また校長が、教職員に意見を言ったり、指示をしたりする際には、非常に分かりやすく、簡潔に伝えておられることがよくわかった。校長の方針が明確にされているという印象を持った。ただ、校長の発言だけですべての教職員がその方針を理解するのは難しいこともあるようで、そうした場合には、教頭が噛み砕いて教職員に説明することも少なくないようである。そうしたことが可能なのも、校長と教頭とが連携を密にして、特に教頭が校長の考え方をよく理解しているためであるといえる。教頭もよく教職員とは話をするようである。また校長もそうした教頭の役回りについては理解が深く、学校の中での教頭の役割の難しさ、しんどさを校長から教職員によく話をしておられるようで、教頭の発言が教職員によく伝わるような配慮も十分になされていると感じた。

教頭の場合には、校長以上に教職員一人一人の特性や家庭環境にも配慮して、声をかけておられるのがよくわかった。そのことが学校内の人間関係や雰囲気をもよいものにしていくように思った。

またA中学校の学校運営の特徴として、方針、ガイドラインなどについて重要なことは冊子を作成して、すべての教職員に配布されていることを指摘することができる。これにより、校長の方針等も明確になるとともに、次年度以降への継続性も高まり、非常に有効な方法であると思った。

5. 自主的な校内研修と教職員の育成

(1) 自主的な校内研修

若い教員が多いということもあり、A中学校では、自主学習グループが作られて、さまざまな問題について、関心のある教員が集まり、さまざまな学習が活発に行われている。参加者数は、日によって異なるが、少なくとも12、3名の参加者はあるようである。メンバーは固定されておらず、関心のあるときに参加したいものが参加するというスタイルである。世話役は決まっているようである。校長や教頭も参加している。

テーマは、たとえば、学級設営のやり方、三者面談のやり方など、教員が日ごろ苦労しているような問題を取り上げ、若手の教員もベテランの教員も一緒になって各自のやり方を紹介したりして、議論しているということである。学級設営を取り上げた際には、参加者で校内を回って、実際に学級設営の様子を見て回ったそうである。そしてその後に、参加者で意見を出し合い、話し合いを重ねたようである、また最後に校長も少し時間をとり、校長自身の学級設営に対する考えを話したそうである。三者面談を取り上げたときには、三者面談でどのような資料を作り、どのような話し方をすればよいのか、ということに参加者で出し合い、お互いに意見を出し合う中で、いろいろな勉強をしていっているようである。若手の教員にとっては非常に参考になるであろうし、またベテランの教員にとって

も、これまで自分がやってきたやり方についてあらためて見直す機会になるであろう。

このような自主的な研修は、教員の職能成長にとってきわめて重要であるし、また教職員間の人間関係を円滑にし、ともに協力して学校づくりに取り組むという雰囲気強くしているのではないかと思われる。校長は自主学習グループとっておられたが、この集まりを非常に高く評価しておられた。校長も取り上げるべきテーマについて提案することもあつたようで、自分の考え方を伝える機会として活用しておられる。気軽に話ができるという雰囲気があり、そのことによってとりわけ若手の教員を育てるという場にもなっているといえる。学校運営にとってこうした雰囲気はきわめて重要である。

(2) 学校運営を通じた教職員の育成

先述したように、A中学校における学校運営の方法の大きな特徴は、校長が、各分掌組織の長に責任をもたせて、自ら主体的に取り組んでいくように促している点である。そのことは、そうした責任ある立場にたつ教職員の職能成長につながっていると思われるし、校長もそうしたねらいで各部長に仕事をゆだねている。特に重視されていることは、それぞれの担当している部署に関わるヴィジョンを描くことである。ヴィジョンを描くということを経験させることにより、学校運営に関する力量をつけさせることを校長は意図している。ヴィジョンを創る訓練をさせているとおっしゃっていた。教職員を育てていこうとする意識は、校長、教頭とも非常に強い。そのことが組織を活性化させていく上で必要なことだと感じた。

6. 地域との連携

(1) 地域に根ざした学校づくり

校長は、A中学校に赴任して2年目であるが、赴任当初に考えたことは、A中学校が開校して10年以上経過しているにもかかわらず、地域の学校になっていない、ということであつたそうである。地域住民の中にA中学校の卒業生がいないこともあり、学校への愛着ということも弱く、地域の人に学校のことが理解されていないということを問題に感じられたそうである。そこで、地域に根ざした学校を創るということを目指して掲げ、校長が率先して地域に出かけていき、地域の人々と積極的に交流を行ってきている。

地域のさまざまな組織、団体の会合に出席し、交流を持つとともに、学校の方針、校長の方針をそこで積極的に説明している。学校の教職員に説明した学校経営方針を、地域の人々にも同じように年度当初に説明しているということである。そして時には地域の人々の学校に依存する姿勢を批判することもあるようである。たとえば、生徒が地域の行事になかなか参加しないということを学校に不満をぶつけてくることがあつたようであるが、それに対して生徒は地域の人々の子どもであり、地域の人々自身が生徒に直接働きかけ、地域の行事への参加を促すべきことを訴えたことあつたそうである。また青少年育成協議会が夜間巡回をしていて、それに校長が申し出てその協議会の人々と一緒に地域を夜間巡回に参加することもあるそうである。その中で地域のいろいろな情報が耳に入ってくるし、また学校のことについてもいろいろと説明することもできるとおられた。このように積極的に地域の人々と交わる機会を作り、また率直に意見を述べることで、地域の人々とのつながりを深めておられることがよくわかつた。その結果、地域の人々が自分の考えをかなり理解するようになったと校長は実感している。このように、十分に対話をしてお互い

の理解を深めている点は、学校内での教職員との関係づくりとも共通しており、ここにA中学校の校長のリーダーシップの源があるといえる。

地域に根ざした学校づくりを校内の教職員に浸透させているのは、校長自らが率先して行動によって示していることにあるように思う。教頭も地域の会合に出席し、懇親会にも積極的に参加しているようであるが、管理職自ら行動で示していることが大切であるように思う。たとえば、PTAの行事で、ナイトウォークといって、学校から海岸までの約20キロメートル弱の行程を歩くという行事がある。学校を深夜1時30分に出発して朝6時ごろ到着するそうであるが、この行事において、校長は先頭に立って生徒と一緒に歩いたということである。校長が赴任するまでは、教員の参加はあまりなかったようで、校長の説得により、それぞれのできる範囲で参加するようになったということである。また地域のソフトボール大会にも中学校でチームを作って参加しているが、校長も加わっている。行動で示すことにより、その必要性を伝えておられるように感じた。

地域の行事への参加は、土、日であれば、ボランティアとなる。したがって、日ごろから多忙な教職員にとってはかなりの負担となり、そのあたりについては特に教頭は気を配っておられることがよくわかった。無理はさせられないということを強くおっしゃっていたが、その中で、地域の人々との交流の重要性、効果があるということを職員会議で発言したり、不満に思っている教職員に個人的によく話をしたりして、必要であるということが理解されるように努めていると教頭は述べておられた。一方的に命じるのではなく、その意味をしっかりと説明して理解させる努力をしておられるという印象を強くもった。こうした働きかけが教職員の意識を変えていくのだと思う。教頭はA中学校に赴任して約半年であるが、その間にも教職員の意識は変わったとはっきりと断言しておられた。

(2) 窓ガラスへの投石事件への対応

昨年度当初に、4夜連続で、校舎の窓ガラスが投石により割られるという事件が起こった。この事態に際して、校長が自ら、教職員に強く訴えかけたそうである。窓ガラスを割られて、腹が立つではないか、学校を守らなければならない、徹夜で見張りをする、一人でもする、賛同する者は夕方、校長室に集まってほしい、と呼びかけたそうである。この呼びかけに、女性教員も含めて多くの教職員が賛同して集まり、学校全体での取り組みになっていったようである。校長は具体的なすすめ方については生徒指導部長に全面的にゆだねた。生徒指導部長を中心にして、交代で、また各自ができる範囲で関わりながら、1ヶ月間続けたということである。家庭の事情で参加できない人は差し入れを持ってきたりして、よい協力関係が作り上げられたようである。その間、校長は、地域の関係者に、この学校での取組みを積極的にアピールして、「先生方がとてもがんばっている」ということを説明して回ったそうである。そうすると、地域の人々もそれに応じて、青少年育成協議会や「おやじの会(A中学校の父親だけでなく、地域全体の父親の集まり)」も、自主的にパトロールをするようになっていった。このようにして、地域全体の取組みへと広がっていき、地域全体で生徒指導に取り組むという雰囲気を作られていったようである。

校長は、一声で、学校全体で取り組もうとする教職員の意識を高め、また学校内部にとどめるのではなく、地域にも説明して回り、働きかけて、地域全体での取り組みに広がっていった。窓ガラスが割られたことを重く捉え、その重大さを伝える力を校長は有していたと評価できよう。そこには、「地域に根ざした学校」ということに対する確かな信念があり、

そうした信念、見識から湧き出るようなかたちで人々に語りかける言葉が生まれ、そのことが学校の組織を活性化し、地域との協力関係が作り上げられている、と強く感じた。

A 中学校は、生徒指導が困難な学校として知られていたが、この事件以降いわゆる荒れはおさまり、落ち着いた学校になっていったと校長は述べておられた。

(3) 地域への生徒の参加

A 中学校には、ボランティアサークルがあり、生徒が地域に積極的に参加する取組みが盛んである。校長の教育理念とともに、生徒のボランティア活動に熱心に取り組む教員が校長とともに赴任したことも、活発になった大きな要因であったようである。

ボランティアサークルが取り組んでいるのは、小学生に対する読み聞かせ、最寄りの駅の清掃、地域の一人暮らしのお年寄りのために、弁当を作って配達する取組みである。読み聞かせをするために、朗読の講習会を受けたりもしている。読み聞かせのボランティアは、毎週行っているもので、水曜日に選本と読み聞かせの練習をし、土曜日に地域の児童クラブで読み聞かせを行っている。最寄り駅の清掃ボランティアは、毎年夏休みの最初の日に行っている。お年寄りのためのボランティアは、年二回行っている。こうした取組みは、地域でも高く評価されているようである。

そのほか、総合的な学習の時間を活用して、生徒が二人で三つの花の鉢を作り、二つは各自が自宅に持ち帰って飾るようにして、残りの一つの鉢をどうするかを二人で考える活動が行われている。つまり地域に花の鉢をもって行くことになるが、どこに持っていくか、生徒が自ら考えることになる。老人ホームなどに持っていっているようであるが、地域の人々からとても喜ばれているということである。たとえば、老人ホームに持っていこうとあらかじめ教師から指示をして決めるのではなく、生徒たちに二人で考えさせるところがすばらしいと思う。生徒の主体性が高まるであろうし、どこに持っていけば喜ばれるかをいろいろと考えることにより、生徒たちが地域に目を向けるきっかけとなるであろう。地域の人たちから大変喜ばれているということであるが、そうした地域の人たちからの反応に接して、あらためて地域とのつながりを生徒たちは意識していくのではないかと思う。

このように、生徒の活動においても地域との結びつきが非常にしっかりと位置づいていることが分かる。地域に根ざした学校という考え方が、生徒の活動、意識の中にもしっかりと脈打っていると言える。校長のヴィジョンが教職員に浸透し、それが教育課程にも確かに位置づけられ、生徒の活動、意識にしっかりと根付いているということを確認することができる。つまり、特色ある学校づくりがまさに成功している事例として捉えることができるであろう。

7. 教育委員会との関係

校長は、教育委員会に対して、積極的に働きかけているという印象を持った。先述した窓ガラスへの投石の事件への対応においては、教育委員会に対して、管理会社によるパトロールの回数を増やすように要求したそうである。経費を理由に渋っていた教育委員会に対して、地域全体で学校を守っているということをアピールし、粘り強く説得したようで、パトロールの回数が増えたそうである。

また人事に関しても、校内のキーパーソンの異動に関して、中、長期的観点から学校運営上の必要性を教育委員会に訴え、常に適切な人材を配置するように、具体的に必要とす

る人材を明示しながら要求しているようである。

校長は、新しい試みをやろうとすると、思い切った冒険をやろうとしても、なかなかやらしてもらえない。教育委員会は前例がないなどの理由でストップをかけてくる、と不満を漏らしておられた。学校の自律性尊重といいながら、実態としてはまだまだ進んでいない部分が多いという印象を受けた。このことは、教頭のインタビューからも感じる事ができた。校長、教頭とも行政経験が長いことから、教育委員会が学校の課題を十分に受け止められていないということを熟知されているように感じた。行政も変わろうとしているがまだまだ変わりきれていないということを言われていたが、学校が多くの問題を抱えて苦労している上に、次々と新しい要求が投げかけられている状況にあり、そうした状況に対して学校の課題を現場の声としてきちんと教育委員会に伝えていくことが重要な使命であると教頭は言っておられた。教育委員会も変わっていかなければ、学校改善は進んでいかないという印象を強く持った。

いずれにしても、校長、教頭の意識が高いこともあり、A中学校の自主性、自律性は高いといってよいであろう。それは、校長、教頭のしっかりとしたヴィジョンとその実行力によってもたらされていると思われる。したがって、教育委員会がそうした学校の自主性、自律性の潜在力をさらに引き出すようなサポートを進めていけば、さらに自律性が高まっていき、学校改善が促進されるのではないかと思う。

8. 組織マネジメントと学校評価

A中学校では、学校の教育目標を簡潔に提示するとともに、本年度の数値目標を掲げ、それをホームページにも掲載している。簡潔、かつ明確にその年度に学校が進むべき目標を示している。数値目標は、次のとおりである。

学校経営に関して

不登校生徒を各学年1名にとどめる。

中学校卒業時に進路未定の生徒をゼロにする。

情報教育に関して

全生徒が学級のパソコンを使用する環境を2ヶ月に一度はつくる。

全学級のパソコンを朝の会で毎朝活用する。

マナーを確立させ、学級のパソコンの不正使用をゼロにする。

国際理解教育に関して

総合的な学習の時間において、パソコンによる活動発表を全学年で実施する。

英語検定に受験者の7割が合格する。

ボランティア教育に関して

外国事情についての講話を2回は実施する。

生徒の企画による校内美化活動を3回実施する。

生徒の有志による地域へのボランティア活動を4回は実施する。

以上のような数値目標の達成度に関して学校評価を行っている。また学校評価に関しては、教職員だけでなく、保護者、生徒にも評価を求めている。昨年度、教職員、保護者、生徒に対して、同じ項目に関して同じ質問をするというかたちの学校評価を行っている。質問項目は、学校経営に関して4項目（生徒用の例、学校生活は楽しい）、教科・学習指導

に関して7項目(生徒用の例、先生たちは分かりやすい授業づくりに努めていると思う)、生徒指導に関して5項目(生徒用の例、自分のあいさつはよくできていると思う)、その他に関して4項目(生徒用の例、学校は、校内の環境美化に積極的に取り組んでいると思う)、特色ある取組に関して(生徒用の例、ボランティア活動は充実してきたと思う)それぞれについて、4段階で回答を求めている。教職員用、保護者用も項目はほぼ共通させ、質問文の表現をそれぞれに応じたものにする程度の微調整をして、学校評価を行っている。今年度については、インタビューを行った時点では、検討中であった。ただ方針として、教職員、保護者、生徒に加えて、学校評議員、一般の地域住民にも学校評価を求めることを考えておられた。現在のところ、学校評価により何か目に見えて効果があったとは感じられなかったが、評価をする体制は整えられつつあると思う。教頭は、学校評価に関する組織を作って、そこでじっくりと考えていきたいと述べておられた。

教頭は、県の組織マネジメントの研修を受け、その考え方を学校に導入する必要性を強く感じておられるものの、それを学校の教職員に浸透させるには、時間が必要だと捉えておられる。

9. 学校運営改善への示唆

校長、教頭が、しっかりとしたヴィジョンを持ち、将来を見据えた学校づくりを進めておられる点が印象に残っている。よく会話が交わされ、議論が展開されているという雰囲気を感じることができた。校長自ら先頭に立って、行動でいろいろなことを示しておられることが、この学校の最大の特色であると思われる。地域に根ざした学校を創ることが、子どもたちにどのような意味があるのか、学校や地域にとってどのような意味があるのかをしっかりとふまえておられると思った。地に足が付いた取組みが展開されていると思う。

問題は、校長が退職されたあとに、現在の取組みが継続、発展されるかどうか、という点にあるように思われる。校長は、この3月で定年退職を迎えられる。A中学校の現在の改善状況、地域とのつながりは、現校長の人柄も含んだ経営的力量に負うところが大きいように思う。これを継続、発展させるためには、教職員の意識改革とそれをふまえた組織運営の体制を整えていくことが必要ではないかと思われる。教頭は、その点はまだまだ不十分であると述べておられたが、現在の良好な状況を発展させるためにどのように組織を改革していくことができるか、次年度の重要な課題であろう。(竺沙知章)